

～辻堂まちづくり会議主催 第9回伝統文化伝承講座～

2020年2月1日
於 辻堂市民センター

辻堂歴史物語(第3回)
—明治時代から昭和(戦前)時代まで—

講 演

I. 明治時代

- 1.概要 要 1-1時代背景 明治維新
1-2諸制度の改革と実施(戸籍法・学制の発布・町村制)
1-3その他の状況(鉄道開通・辻堂海岸軍事演習)
1-4諏訪神社の祭礼と村民の日常生活
- 2.主な出来事 2-1地租改正をめぐる村内騒動
2-2小笠原東陽 耕餘塾を開設
- 3.伝 承 3-1どんど焼き(左義長)

II. 大正時代

- 1.概要 要 1-1時代背景 第1次世界大戦
1-2大戦終結後に大恐慌が襲う
1-3辻堂村の職業別概況
- 2.主な出来事 2-1辻堂駅の開設(請願駅)
2-2関東大震災が襲う
- 3.伝 承 3-1地引網漁とよんえ、ふんえ

III. 昭和(戦前)時代

- 1.概要 要 1-1時代背景 世界金融恐慌
1-2軍需産業の発展と工場進出
1-3辻堂商店街と住宅地の開発
1-4戦時下の生活
- 2.主な出来事 2-1太平洋戦争の終結
2-2辻堂駅構内で火薬が大爆発
- 3.伝 承 3-1木又地蔵と松の植林

以上

辻堂歴史物語(第3回)

—明治時代から昭和(戦前)時代まで—

於 辻堂市民センター

I 明治時代(1868～1912)

1. 概要 明治時代は国家の最高権力者が交代したため、すべての制度や体制が改革された激動の時代であった。

1-1 時代背景・明治維新

(a) 大政奉還と王政復古

- ・慶応3年(1867)10月、江戸幕府第15代将軍徳川慶喜は大政を朝廷に奉還した。
同年12月『王政復古』の宣言が発令され、これにより、265年に及ぶ幕藩体制が崩壊し天皇親政体制への移行が表明された。
ここに、明治維新が実現し、明治新政府が誕生した。

(b) 社会全分野にわたる改革

- ・新政府は天皇親政の名のもと、社会全ての分野にわたって改革を行った。
政治体制、身分制度、法律、経済、教育、外交、文化、風俗、宗教政策など

(c) 明治への改元と首都東京の誕生

- ・慶応4年(1868)9月、明治天皇は京都より東下され、江戸城入られ皇居とされた。
・同月4日付をもって明治に改元し一世一元制が制定された。江戸は東京に改称し首都となった。

(d) 廃藩置県の実施

- ・明治4年(1871)7月、政府は『廃藩置県の詔書』を発令し実施した。
・神奈川県は相模国と武蔵国の一部(川崎・横浜)からなり、その後、幾度かの統廃合をへて、明治9年(1873)に現在の県域が確定した。

1-2 諸制度の改革と実施

- ・明治政府は新しい制度を次々に策定し実施したが、ここでは辻堂の村民の生活に直接的に関係するものに絞って取り扱うものとする。

(a) 戸籍法の制定と苗字の使用

- ・明治4年(1871)4月『戸籍法』が制定され、日本国民は全員その本籍・氏名を登録することが義務付けられた。

出生・死亡・婚姻・除籍など戸籍上の異動についても必ず申請することが明示された。

- ・この前段階として明治3年(1870)9月に「一般平民も苗字を使用することを許可する」との通達があった。これにより、従来名前だけで呼び合っていたが、苗字をつけて呼び合うようになりまた書類に署名するようになった。

- ・当時の辻堂村の160戸の苗字の状況

伝承の17氏姓といわれた下記の家が130戸を占める

石井、櫻井、吉田、山田、植木、森、落合、川延、高橋、相澤、門倉、廣野、曾我、田中、齋間

このほかの苗字として

宮崎、小澤、杉山、土橋、重田、小島、坪田、山口、高柳、塩澤、上柳

これにニッ谷は辻堂村であったので

川澄、鈴木、神保、塚本

を加えると、辻堂村の姓(苗字)は全体で30前後

(b) 学制の発布と小学校の発足

- ・明治5年(1872)8月、学制が発布された。「村に不学の戸なく、家に不学の人なし」と小学校教育の普及を主旨とした。画期的な近代的学制が施行された。
- ・辻堂村では
 - 明治7年(1874)、北の寺の宝珠寺に寺子屋が開設された。加藤清吉ら数名が教鞭をとった。(辻堂の教育の発祥の地とされる)
- ・明治10年(1877)辻堂学校が北町の大沢商店の裏付近に開校
- ・明治25年(1892)辻堂学校と羽鳥学校が合併してガル池付近に尋常日進小学校が開校し、辻堂と羽鳥の生徒が通った。
- ・明治36年(1903)大庭と日進両校が合併して尋常明治小学校が大庭に開設された。(昭和20年5月に辻堂小学校が開校するまで、辻堂の住民は全員この学校に通って学んだ。)
- ・辻堂村の就学率
 - 明治19年(1886)に『小・中等師範学校令』が発布され、小学校が義務教育とされた。
 - 辻堂村の就学率は
 - 明治11年(1878)38%から順次上昇し
 - 明治30年(1897)66%
 - 明治43年(1910)ほぼ100%に達した。

(c) 地方制度の改革と町村制の施行

- ・明治11年(1878)政府は、『群区町村統制法』を発布し、地方制度を大幅に改革し、
県 — 郡 — 町村という行政体制に再編した。
- ・同年2月 藤沢に高座郡役所が開設された。
 - 区制の施行により、辻堂村は小区となり、民選により辻堂村の戸長を選出
 - 明治6年(1873) 吉田 庄右衛門
 - 明治9年(1876) 門倉 忠兵衛
 - 明治12年(1879) 吉田 八左衛門が就任
- ・明治17年(1884)辻堂、大庭、羽鳥、稲城、鶴沼の5村が連合し組合村が結成され戸長に
明治17年(1884)金子 小左衛門が就任
- ・明治21年(1888)市制、町村制が発布され
 - 明治21年(1888) 辻堂、大庭、羽鳥、稲荷が合併し明治村が結成され、村長に
 - 明治21年(1888) 金子 小左衛門
 - 明治26年(1893) 相澤 繁右衛門が就任
- ・明治22年(1889) 藤沢地域は以下の10ヶ町村に再編し
 - 2町は 藤沢大坂町、藤沢大富町
 - 8村は 川口村、村岡村、明治村、六会村、渋谷村、御所見村、小出村、鶴沼村
- ・明治41年(1908) 藤沢町が成立
 - 明治村は鶴沼村とともに藤沢町と合併した。町長に
 - 明治41年(1908) 高松 良夫
 - 明治45年(1912) 金子 角之助が就任

(d) 地租改正条令の公布

- ・明治6年(1873)7月、政府は財政基盤を確定するため『地租改正条令』を公布した。
- ・近代的租税制度への変革であった。
 - 改正の要点は次の3点
 - (1) 現物納付(米)から金銭納付へ変える
 - (2) 地租は土地の所有者が負担する

- (3)納税額は地価の3%とし、作柄により増減しない
- ・この改正は税収の確保が主な目的であったので、農民に更なる負担増となったため、各地で租税改正反対の烈しい闘争や一揆が頻発した。
(次の辻堂の主な出来事で再度取り上げる)

1-3 その他の状況

(a) 鉄道の開通

- ・明治5年(1872) 初めての鉄道 新橋－横浜間で開通
- ・明治20年(1887) 横浜－国府津間が開通し東海道線が延長された。
このとき、藤沢駅、平塚駅が開駅
- ・明治31年(1898) 茅ヶ崎駅が開駅
辻堂村の住民は、東は藤沢駅、西は茅ヶ崎駅の両駅を利用するしかなく不便を強いられた状態が続いた。
(辻堂駅の開駅は、大正5年(1916)までまたねばならなかった)

(b) 辻堂海岸の軍事演習と分宿

- ・鉄砲場から演習場へ
明治初年、明治政府は旧幕府から横須賀造船所を引き継ぐと、横須賀を日本海軍の主要な軍港として強化した。
その後、海軍省は辻堂の旧鉄砲場の敷地を買収し、これを拡張した。海軍の演習場や実弾射撃場として活用した。
- ・海軍用地として指定された地域
大ヤゲン、弥平田、砂山、勘久、浜見山の海岸側にまたがる広大な土地(約31万坪、103万㎡)で西は茅ヶ崎にまで及んでいる。
- ・明治政府は旧鉄砲場を一括接收する形で幕府から引き継いだのではなく、一部に地主の所有地を認めながら徐々に民有地の買収を進めていった。
- ・用地買収の推移
明治4年(1871)、辻堂村(戸長 吉田庄右衛門)が県庁より64町歩(約20万坪)を72円で払い下げを受けた。その後、砂地で利用価値がないとして、村議を経て、横浜の某氏に420円で売却した。(その後東京の某氏に転売された)
- ・明治22年(1889)に羽鳥村の三鶯八左衛門(大三鶯の当主)と大庭村の金子小左衛門(金子小一郎元市長の祖父)ら5名がこの土地を東京の某氏から5,000円で購入した。
- ・明治38年(1905)海軍省が「海軍砲術試験場」として上記5名より30町歩購入した。
5氏は更に70町歩を久原某氏に20万円で売却された。その後、海軍省はこのうち30町歩を久原某氏から購入したとされる。
- ・海軍の演習の状況
明治35年(1902)1年間に実施された演習の状況は断片的な資料しか残っておらず詳しくはわからない。
実弾射撃、小銃射撃、野砲射撃、野外演習、戦闘訓練、遠距離射撃など、それぞれ3～7日間の日程で実施された。
この演習には、9700トン級の1等巡洋艦2隻、600トン級の2等砲艦8隻が参加している。
射撃訓練は、海水浴シーズンの7～8月は避け、主に12月～1月に集中(この2ヶ月で年間の半分)して行った。
- ・横須賀鎮守府の海兵団・水雷団その他の陸上演習と艦隊の海上訓練は毎年同じように

行われた。

・軍隊の民宿と食事

・辻堂では各農家が教班長や兵士の宿舎(民宿)にあてられた。士官は別荘に宿泊したが、兵士は横須賀から鎌倉を通り、隊列歩行で辻堂まで来た。(これは、大正5年の辻堂駅開駅まで続いた。)

・宿舎の食事は各農家では作らず、海軍専用の大きな炊事場で炊事係が一括して作った。西町の吉田八左衛門宅と東町の廣野浅右衛門宅の広い敷地に炊事場が設営された。

・各農家は分宿した兵隊さんの食事を背負籠しよいかごを背負って取りに行った。当時士官50銭、兵士16銭の宿泊料は当時、現金収入が極めて乏しかった農家にとって大変大きな収入であった。

1-4 諏訪神社の祭礼と村民の日常生活

(a) 諏訪神社の祭礼

・辻堂の総鎮守社である諏訪神社のお祭りは江戸時代初期から始まった(400年前)といわれるが、昔は山車や神輿はなかったので、各町内の神社の前に幟旗のぼりばたを立てたくらいであったと思われる。(東町の古い幟旗が現存するが、1638年製のものである。)

・現在の例大祭は、7月26日宵宮(神輿渡御)27日本祭となっているが、これは明治以降に定着したものとのおもわれる。

・山車だし

・約130年前の明治10年(1877)頃に作られた。四町内がそれぞれ鎌倉の業者より当時の金で、400円で購入した。(現在の1,600万円位か)

・当時の各町内の所帯数はおよそ40軒位なので、単純平均で1軒当たり10円(現在の40万円位)の負担になる。各家では長年にわたり懸命に積み立てをして漸く購入したという。

・人形

山車に乗せる等身大の人形は、およそ100年前の明治末頃の作といわれる。すべて歴史的人物で西陣織の豪華な衣装をまとっている。

東町 源 頼朝

南町 武内 宿彌

西町 八幡太郎 義家

北町 神 功 皇后

山車は平成5年11月1日付で、藤沢市の「有形民俗文化財」に指定された。

・神輿みこし

最初の神輿は、大正時代に購入され、天王山に祀られ宝珠寺の僧侶が管理していた。

その後、昭和9年に村の総意によって浅草の業者より当時1,000円で購入したものが現在のもの。平成になってもう一基が新調され、現在の二基が担がれている。

(b) 辻堂の村民の日常生活

・住居

・有産階級の家は、江戸時代の厳しい規制がなくなったことで、屋敷は概して大きくなった。母屋の建物は、全世帯が茅葺屋根であったが、門や倉、物置小屋などを設ける家が多かった。時代を経るにつれ、身分や格式にとらわれずに自分の思い通りに家を建てる者が増えていった。

(一般的な農家の見取り図を参照)

・食事

・村民の日常食は、有産農民でも概して質素で、主食は雑穀中心で、米を遣う場合でも「「りょうはん」糧飯」といって、7割は雑穀であった。

主食は「おぼく」という麦飯むぎめし(麦7:米3)がほとんどの農家で作られ食された。前の晩に麦だけをよく煮ておいて、翌朝米を入れて本炊きをする。

・辻堂は田圃が少ないため米の収穫量が少なかったため、米の消費を極力抑え、その分を売ったものだという。

・このおぼくに金山寺味噌や地引網で獲れた魚や自家の畑で採れた野菜をおかずにして食べた。(肉はほとんど食べない)

辻堂では間食として「芋団子」や「べったら焼き」「乾燥いも」など辻堂特産のさつまいもを使った食品がさかんに作られた。

・衣服

・明治時代の辻堂では、ほんの一部の特殊な職業の人を除いて、ほぼ全員が和服であり、洋服を着用する人は極めためずらしかった。

・男は短い半纏はんてんに股引ももひきを袴はかまいた。女の方は、木綿の長い着物が一般的で下着に腰巻を着用した。農家の仕事着は、山着やまぎ、野良着のらぎといったが、これは普段着が古くなったものを使った。冬など寒いときは、山着の下は襦袢じゆばんを着て綿入れを間に入れた。

・結婚式などの正装としては、男は紋付、羽織、袴を着た。女性は江戸褌えど つまを着た。

着地はたおと機織り

木綿地は各家か機械織で織った。嫁入り道具の一つであった。

裁縫

着物の仕立ては各家の主婦が行うことが一般的であった。辻堂の娘たち(16歳前後)の大半が農閑期に辻堂から歩いて藤沢の真田屋(仕立屋)に裁縫を習いに行った。

2 主な出来事

2-1 地租改正をめぐる村内抗争

・明治6年(1873)『地租改正条令』が公布

近代的な租税制度への変革であったが、税収の確保が主目的であったため農民の更なる負担となった。

・このため辻堂村では、有産農民と一般農民との間で土地の所有権をめぐる壮絶な闘争が繰りひろげられた。

2-2 小笠原東陽 耕餘塾を開設

・明治5年(1872)羽鳥村の名主三觜八郎右衛門の支援を受けて羽鳥村に教習所「読書院」を開設した。のちに「耕餘塾」となり相州第一の高等学府として高い評価を受けた。

・県下唯一ともいえる中等教育機関として、県内の広範囲から優秀な人材が集まり、当塾で学んだ生徒数は1,000名を超えたといわれる。

・卒業生には、政治家、軍人、実業家、教育者など各分野で活躍した著名人を数多く輩出している。辻堂村からも10名以上のものが塾生となっている。

3 伝承

3-1 どんどこ焼き(左義長)

・辻堂村では「だんご焼き」といって、毎年1月14日各町内の道祖神の広場で行われてきた。

・正月の松飾やしめなわを燃やし、村民それぞれが大きな団子(米粉で作ったもの)を2・3個柳の枝の先にさし、火にあぶって焼く行事。

・家族のみんなが、この団子を食べると、一年無病息災に過ごせるといわれた。この行事がなぜ左義長と呼ばれるのだろう。

II. 大正時代(1912～1926)

1. 概要

1-1 時代背景 第1次世界大戦

- ・大正3年(1914)4月、ヨーロッパで第一次世界大戦が勃発した。
この戦争により、日本は戦需景気に沸きかえり、行き詰った閉塞感を一挙に吹きとばすとともに、莫大な利益を得て経済は飛躍的な発展をとげた。

1-2 大戦終結後に大恐慌が襲う

- ・大正9年(1920)大戦が終息すると反動として世界的大恐慌が襲った。
慢性的な大不況時代に突入し、小作争議や労働争議が頻発するとともに銀行ととりつけ騒ぎがおきた。

1-3 辻堂村の職業別概況

- ・大正2年(1913)時の状況
農業194戸、漁業10戸、商業10戸、工業7戸、その他6戸計227戸
辻堂村は依然農村の性格が濃く、商業や工業が極めて少ない。
- ・とくに商業についてみると
大正初期の辻堂は商店が極めて少なく、本村四ツ角付近に、駄菓子屋やよろずや(雑貨)があった程度であったが、大正5年(1916)年に辻堂駅が開設されると駅前通りに店舗が続々出現した。
- ・これが後に、駅前商店会の「十日会」や日の出町(後の仲町)の「土曜会」さらに若松町(現新町)の商店街へと発展した。なお、大正7年(1919)の早い時期に、東町の落合辰五郎さんが、東海岸通りにお茶屋「辰巳屋」をオープンしている。

2. 主な出来事

2-1 辻堂駅の開設(請願駅)

(a) 開設運動

- ・明治45年頃 設置促進運動始まる。
- ・大正2年(1913)「辻堂停車場期成同盟会」結成
- ・大正4年(1915)『上申書』を鉄道院に提出(発起人51名連盟)
- ・上申理由
 - ・藤沢～茅ヶ崎間7.5kmと長い
 - ・雑穀、甘露の出荷量が急増
 - ・海軍の兵員、物資の運送が急務
- ・提示条件
 - ・用地2500坪無償で提供
 - ・建設資金2,500円相当を住民が負担

(b) 辻堂駅オープン

- ・大正5年(1916)12月1日住民の熱意の結晶である辻堂駅がオープン。
開所式典や祝賀行事は、藤沢町・辻堂村をあげて盛大に開催。
名士、関係者が多数出席した。
- ・辻堂駅の駅舎は洒落た洋風の立派な建物である。なお、「辻堂駅開設記念碑」が駅前広場に立っている。
表面に漢文で建設の趣旨が、裏面に建設資金の寄金者の氏名が刻まれている。

2-2 関東大震災が襲う

(a)大正12年(1923)9月1日午前11時58分 大震災が起きる。

・震源地 鎌倉沖40kmの地点

マグニチュード7.9 震度7

・関東全般と山梨、静岡を含む広範囲に、災害や津波など壊滅的な被害をもたらした前代未聞の大地震であった。

(b)藤沢地域の被害

・死者127名、負傷者114名、被害戸数2,700戸(全体87%相当)

各地の被害状況はすさまじい目を覆うばかりの惨状。

・辻堂地域もほぼ同様の被害状況で、農家はほとんど全半壊した。

辻堂駅、諏訪神社も全壊している。なお、この震災直後に建てられた家屋で現在残っている家屋は極めて稀で5.6軒程度。

3. 伝 承

3-1 地引網漁とよんえ、ふんえ

(a)地引網漁

・大正8年(1919) 網元10軒

・早朝、浜見山の松の木の上から沖をながめ、海面の色の変化で魚群のようすをみる～網元が3時半頃「浜ふれ」をして乗り手、曳き手に集合をかける～11の網元の船が一斉に沖に漕ぎ出す(漕ぎ手4人、舵手1人、網手2人の7人1組)～なむらをめがけて殺到する～500mの沖を廻りながら順次網をおろし、岸にもどってくる～網の両端に結んだ綱を浜の曳き手が2手に分れて引き揚げる。

(b)よんえんふん

・男の子2人がふんどしをしめ、「網(たも)」に獲れた魚をいっぱい入れ浜から村まで松林の中を、「よんえんふん」と大きな掛け声をとばしながら駆け抜けるのだ。

・まず諏訪神社と町内のお稲荷さんに魚をお供えした。その後村中をかけ声をとばしながら駆け廻って、道に出てきたおばあさんや子供たちに魚を配ってあげた。この威勢のよい風習は辻堂特有のもので「かけよい」とよばれた。

Ⅲ. 昭和(戦前)時代(1926～1945)

1. 概要

1-1時代背景 世界金融恐慌

(a) 金融恐慌が発生

- ・昭和2年(1927)3月 大規模な金融恐慌が発生
政府の震災手形の不明瞭な処理
- ・昭和4年(1929)10月 ニューヨーク株式市場が大暴落
これを契機に世界金融恐慌に突入

(b) 農作物の価格が急落

- ・昭和元年(1926)に比べ昭和6年(1931)の主な農産物の下落率
米47% 小麦45% 甘藷54% 繭28%
- ・この価格の下落は農村のみならず、市街地にも深刻な影響を与えた。
昭和7年(1932)時には、藤沢地域の人口の5.4%にあたる
1,392名が生活困窮に陥った。
- ・辻堂村も、とくに甘藷と繭の大巾な値下がりを受け、深刻な状態に陥った。

(c) 企業の倒産と失業者の急増

- ・京浜地区の工業地帯は大規模な操短や、中小企業の倒産が拡大し、失業者が街にあふれ出た。
- ・帰郷の旅費にも困り、東海道を徒歩で帰る者が多数あった。
遊行寺は、毎夜30名前後の者が銀杏の木の下で野宿したため、無料救護所を設け、麦飯で接遇したという。

1-2 軍需産業の発展と工場進出

- ・昭和6年(1931)の満州事変後、日本は本格的に大陸侵略にのりだしたため、藤沢地域においても軍需関連企業の進出が目立ってきた。
- ・代表的な企業は次のとおり
 - ・関東特殊製鋼
 - ・昭和7年(1932) 小松製作所として鶴沼に工場を設立
 - ・昭和11年(1936) 住友金属工業の系列下に入ると同時に辻堂駅北側の広大な地域に移転。
 - ・日本精工
 - ・大正5年(1916) 東京蒲田で設立。日本有数のベアリング・メーカー
 - ・昭和12年(1937) 鶴沼神明の土地を購入。翌年3月開業
 - ・東京螺子製作所
 - ・大正10年(1921) 片瀬町に進出。各種の兵器の製造。
螺子はネジのこと。

このほか、辻堂地域には、

片倉製糸、横河電機、山本工場(後の住友発条)、ダストキーパーなどが軍需産業として発展した。

1-3 辻堂商店街と住宅地の開発

(a) 辻堂商店街の発展

- ・昭和に入り海軍が頻繁に演習に来るようになり、商店の売上が増大し、物資も豊富に出回るようになった。

- ・別荘や住宅の増加にともない商店も増えていった。

昭和5年(1930)から昭和12年(1937)にかけて

駅前商店会「十日会」

仲町商店会「土曜会」

若松町商店街

が誕生し、辻堂もようやく町らしくなったといわれた。

(b) 住宅地の開発

- ・辻堂地域の住宅地の開発は次の3つに要約される。

桜花園と富士見ヶ丘住宅地

東海岸住宅地

太平台住宅地

- ・住宅地の大規模開発に伴い、主要道路の新設が急務となり、辻堂駅から海岸に至る海岸道路(正式には「辻堂停車場道路」)が昭和11年に開通した。

1-4 戦時下の生活

(a) 敗戦が濃厚、度重なる空襲

- ・太平洋戦争も開戦後3年8ヶ月を経過した昭和20年に入ると戦況は一気に悪化し敗色が濃厚となった。

昭和20年(1945)2月硫黄島が陥落、4月沖縄が米軍に占領された。

- ・昭和20年に入るとサイパンを発進した大型爆撃機B29による空襲は本格化した。

- ・東京大空襲 3月9日 B29 300機 来襲

19万発の「焼夷弾」攻撃で東京は火の海

一夜で約10万人死亡

- ・藤沢地区空襲 5月24日 B29来襲

360発「焼夷弾」投下、工場地帯大被害

辻堂では、「関東特殊製鋼」が全壊。

幸いにも住宅地の被害はほとんどなかった。

(a) 戦時下の

- ・住 居 灯火官制、消火用水槽
- ・服 装 国民服、ゲートル、モンペ、防空頭巾
- ・食 物 配給、麦飯、パン焼き器、カルメヤキ
- ・学 校 集団登校、軍事教練、勤労奉仕
- ・その他 防火演習、防空壕、出征壮行式
日の丸寄せ書き、千人針

2. 主な出来事

2-1 太平洋戦争の終結

(a) ポツダム宣言

昭和20年(1945)米・英・ソの3首脳が会談し、日本に無条件降伏をよびかける「ポツダム宣言」を発す。

(b) 同年、8月6日に広島、8月9日に長崎に原子爆弾が投下される。

市街地は一瞬のうちに焦土に、死者広島10万人、長崎7万人。

この間、8月8日ソ連が日ソ中立条約を一方的に破棄して満州、南樺太、千島に侵入した。

(c) 最高会議で、徹底抗戦を主張する軍部と受諾を主張する外務省が対立して収拾がつかないため、鈴木貫太郎首相の要請により昭和天皇が裁断を下すという異例な形で「ポツダム宣言」の受諾は決定された。

(d) 昭和20年8月15日、昭和天皇はラジオを通じ、全国民に対し「ポツダム宣言」の受諾を表明し、日本の敗戦を知らしめたのである。ここに全国民を巻き込んだ太平洋戦争は極めて惨めな状態で終戦を迎えたのである。

2-2 辻堂駅構内で火薬が大爆発

・昭和20年(1945)12月17日、午前7時15分頃、

辻堂駅構内で天地を覆すような大爆発が起こり、周辺は一瞬にして阿鼻叫喚の地獄と化した。

死者8名、重傷6名など大きな被害。

3. 伝 承

3-1 木又地蔵と松の植林

・誰に頼まれたのではなく一人でコツコツと長い期間にわたり、若い松苗を植えつづけた奇蹟的な人物がいた。東町の落合又五郎さんでみんなに「木又さん」と呼ばれた。

・辻堂の松林はこの人に負うところが大きい。後年、この人の功績を讃えて、大野守衛氏をはじめ有力者が「木又地蔵尊」を造立した。

17氏族の系族105家<江戸中期>

本家 (17家)	分 家 (88家)
石 井 所左衛門	<10家> 紋兵衛、新左衛門、利右衛門、忠蔵、甚五左衛門 安兵衛、茂兵衛、馬五郎、五兵衛、惣右衛門
櫻 井 半重郎	<5家> 倉吉、仙右衛門、六右衛門、太郎右衛門、喜太郎
櫻 井 庄左衛門	<4家> 善左衛門、又五郎、喜之助、新右衛門
吉 田 太兵衛	<5家> 八左衛門、太七、三郎兵衛、三左衛門、善兵衛
吉 田 平太夫	<11家> 次郎兵衛、宗次郎、六郎右衛門、清次郎、繁二郎 増五郎、利兵衛、馬右衛門、久右衛門、重郎右衛門 軍兵衛
山 田 作兵衛	<2家> 平兵衛、六左衛門
植 木 主 計	<4家> 勘左衛門、善吉、平吉、源左衛門
森 太郎兵衛	<9家> 傳助、太郎左衛門、儀左衛門、常右衛門、平左衛門 徳右衛門、孫四郎、政右衛門、源右衛門
落 合 内 匠	<10家> 小左衛門、喜兵衛、長兵衛、六左衛門、忠八 助左衛門、清七、五右衛門、傳太郎、清八
川 延 源兵衛	<5家> 安太郎、又五郎、三之助、林蔵、善蔵
高 橋 権右衛門	<6家> 藤兵衛、萬右衛門、安右衛門、吉右衛門、角右衛門、 茂右衛門、
相 澤 芳兵衛	<12家> 久右衛門、権右衛門、彌右衛門、仁右衛門、 七五郎、浅右衛門、重左衛門、半右衛門、繁右衛門、 長左衛門、音松、紋左衛門
曾 我 松兵衛	<2家> 治右衛門、八郎兵衛
廣 野 浅右衛門	<1家> 清左衛門、
門 倉 與次右衛門	<1家> 忠兵衛
齊 間 孫左衛門	<1家> 権兵衛
田 中 嘉兵衛	

上記は、加藤徳衛門著『藤沢郷土誌』の「辻堂民族の起源」(718頁)より、
若干の修正をして転載した。

17氏族の時代別推移

当初の17氏族の祖の17家が

江戸時代・中期（元禄7年 1700頃）

総戸数 131戸のうち 105戸（80%）

江戸時代・末期（天保11年 1840頃）

総戸数 160戸のうち 130戸（81%）

明治時代・初期（明治17年 1884頃）

総戸数 180戸のうち 162戸（90%）

昭和時代・中期（昭和35年 1960頃）

分家と農地の宅地化が進み 331戸

平成時代・現在（平成23年 2010頃）

さらに分家が増加し 506戸

氏姓の時代別推移表<現代まで>

(戸)

氏姓	祖	江戸時代	明治時代	昭和時代	平成時代
		(1700年)	(1884年)	(1960年)	(2010年)
吉田	2	18	29	60	92
櫻井	2	11	22	40	89
高橋	1	7	11	36	57
石井	1	11	19	34	56
落合	1	11	19	24	44
森	1	10	12	15	32
相澤	1	13	21	28	30
山田	1	3	4	25	26
植木	1	5	7	13	25
曾我	1	3	3	6	17
廣野	1	2	4	10	15
川延	1	6	6	8	8
田中	1	1	1	6	8
門倉	1	2	2	3	4
齊間	1	2	2	3	3
計	17	105	162	311	506

・明治時代の数値は『辻堂の旧家』（石井三郎氏作成）より算出

昭和と平成の数値は「辻堂の住居表示地図」より算出